

「牛とともに歩む」

愛媛県立野村高等学校畜産科2年 入船 朔空

私の家は愛媛県西予市城川町で搾乳牛65頭、育成牛35頭、計100頭を飼育する専業農家です。我が家の酪農は曾祖父から始まり、現在父で3代目です。私の父は2012年に静岡県で開催された全日本ブラック&ホワイトシヨ―というホルスタイン共進会で四国勢では初となる日本一を獲得しました。私には夢があります。それは父と肩を並べる酪農家になるということです。

私が酪農を志すきっかけは乳牛共進会との出会いでした。小学3年のある日、父が「今度の共進会でこの子牛を出すけん。お前が牽いてみるか。」と言ってくれました。子牛と言っても体重が200kgもあり、思うように最初は歩いてくれません。父にロープの持ち方、顔の持ち上げ方、きれいに見せるコツなどを教えてもらい、毎日練習しました。共進会当日、待機場で待っている時はあまりの緊張で胸が押しつぶされそうになりました。「この牛を何とか入賞させたい。」その一心で舞台上に上りました。極度の緊張の中、それでも審査員に集中し、牛をきれいに見せるように全力を尽くしました。そして序列決定になり審査長が私の牛を一番に指差した瞬間、喜びが爆発しました。この共進会で私は父の偉大さを知り、同時にこの家を継いで酪農家になろうと決心しました。その思いは年を重ねても変わることなく、私の人生を作り上げる基盤となっています。

そして今、私は県下唯一の畜産科がある野村高校で牛について学んでいます。今年5月、先生から「家畜審査競技県大会に出場したい人は言って来てください。」という案内があり、将来は酪農の後継を考えている私にとって、この競技に参加することは乳牛について学べる大きなチャンスだと思いい、クラスの友人とともに「出場したいです。」と志願しました。そして、いよいよ家畜審査競技に向けての勉強が始まりました。

乳牛を審査していくポイントは大きく3つあります。1つ目は乳器です。生乳を生産する乳牛にとって一番大事なポイントとなります。乳器の見分け方には、前乳房の付着や中央懸垂靱帯が深く入って、後乳房をしっかりと持ち上げているかなどを見極める必要があります。2つ目は体貌と骨格です。これは素人には順位付けが難しく、先生から乳牛の鋭角性を示す「3つのくさび形」が

ポイントだと教わりました。3つ目は肢蹄です。肢蹄は後ろから見た時に真つすぐなものが良く、側面から見た時に曲がり過ぎず、真つすぐ過ぎずと丁度良いところを見極める事が大切でした。この3つの部位が総合順位に大きく関わってきます。初めは、全くと言っていいほどうまく順位付けができませんでしたが、日々勉強していくと、体型の良し悪しがわかるようになり、自信も付いてきました。

大会当日、県内の農業高校から多くの選手が集まり、その人数の多さに驚き、一瞬この中で入賞できるのだろうかと不安がよぎりました。しかし、「今までやってきたことを出し切るだけ」と自分に言い聞かせて競技に挑みました。出題された4頭の牛をじっくり見たり、実際に触ったりして順位付けをしていきました。今まで習った事が次々と脳裏に浮かび、自分の中では納得のいく順位付けをして競技を終えることができました。

後日、結果が学校に届き、友人とともに優秀賞を取ることができました。目標としていた最優秀賞には一歩及ばず悔しい気持ちもありましたが、牛を見るポイントがつかめたことは私にとって何よりの財産となりました。

将来、私の目指す酪農経営は今よりもさらに牛の頭数を増やし、規模拡大を図ることで。しかし、今のままでは人手も立地も足りず夢のまま終わってしまうかもしれません。夢を実現するには、まずは情報を仕入れることが大切だと考えます。これから先、私自身が多く酪農家を見て回り、多くのことを吸収し、将来自分が本格的に家を継ぐ時に私の理想とする牛舎にしていこうと思っっています。また、酪農を通して「農業と地域のつながり」を太くしていきたいと考えています。高校に入学し、私は非農家の生徒たちが楽しそうに実習をする姿を見て、農業には人の心を変える大きな力があると思うようになりました。そこから私は、子供たちが幼い頃から農業とかかわり、「農業の魅力」に気づくことができれば、将来の職業選択の幅も広がり、私と同じ未来の農業を支える人が出てくるのではないかと思います。

これからの未来はどうなっていくのかわかりません。だからこそ自分たち若者が自らの手で未来を切り拓いていく必要があると強く思っています。私は日本の農業の未来は明るいと信じています。牛の乳房には牛乳がたくさん詰まっています。そして酪農には夢と可能性がたくさん詰まっているのです。